

やっと、ずっと好きだった人の特別な存在になった。

嬉しくて、本当に現実なのかわからなくて、ほっぺたをひっぱったりした。

もう、あとは結婚式をして、幸せな家庭を築くの！と意気込んでいたのに、ルシアン
の口からは、衝撃的な言葉ばかり出てくる。

「そう。リディアのここにあるクリトリスが、私が贈るリングにハマらないと結婚できない。こっちだと、指輪を相手の指にはめてあげるのと一緒にだよ」

え……？クリトリス……リング……？

1つ1つの言葉は理解できても、文章を理解できない。

「クリトリス大きくするのも、エッチのお勉強も、一緒に頑張ろうよ、ね？リディアなら、クリトリス大きくできるよ。それに、せっかく両思いになったのに、これでお別れになっちゃうのは悲しいだろ？」

そんなこと言われたら……………。

しかも、ずっと大好きで、やっと両思いになれたのに……こんなところで悩んでいては、幸せになれない……。

「うん……。不安な気持ちもあるけど、ルシアンのこと信じてるし……お別れなんてしたくないし……！頑張る………」

ぎゅつと唇に力を入れて、決意を固める。

「嬉しいよ。私のために頑張るって決断してくれて。クリトリスいっぱい虐めて、頑張って大きくしようね」

1好きな人と結ばれて幸せなはずなのに既に壁にぶち当たりました

「この後、ルシアン様と会うんでしょ……？そんなにいっぱい食べて大丈夫……？」

一緒に女子会へ参加していた親友のエリナが引いた顔で心配しているが、いつものことなので気にしない。

「大丈夫……！だって、お腹減ってたんだもん……。エリナはもつと食べないと！」

エリナのお皿にケーキを分けていると、近くの令嬢の会話が耳に入ってくる。

「そういえば、ルシアン様が王城に来ていらっしゃるみたい……！」

「えー！また王様に呼ばれたのかしら？」

「また、結婚の話じゃない？ここ最近、しょっちゅう呼ばれては、女性を紹介されているみたいよ？」

まあ、この女性紹介の話は、今に始まったことじゃないし、ルシアンも、本気にしていないし、結婚しないと言っていたから大丈夫……。

また、この話で盛り上がっているのかと、安堵していると、ルシアンから聞いていない話が耳に入ってくる。

「今回の女性とは本気で結婚しそーみたいですね……！もう3回もお会いになってるって聞きますしね」

え……！？そんな話、ルシアンから聞いてない……。思わず、手に持っていたフォークを落としそうになる。

「リディア……今の話本当かな……？」

なぜか、エリナが泣きそうな顔になっている。

「ただの噂かもしれないでしょ？ルシアンから聞くまで信じない……。それに、ルシアンと結婚するのは私だもん」

小さい頃、連れ去られかけた私を救ってくれたルシアンをずっと一途に思い続けてきた。ルシアンは、私のこと妹みたいな存在にしか思っていないかもしれないけれど、特別な存在に

なりたくて自分磨きも頑張った……！

やっと、本気でアプローチしようと思つてた時にこんな話を聞かされて、いてもたつてもいられず、令嬢の話していた場所に直接行こうと決める。

「ごめん、エリナ。ルシアンのところに行つて、自分の目で確かめてくる……！」

「ええ……！？どこにいるかわかるの……？」

「さっきの会話で聞こえたの……！だから、ルイに上手く言つておいて欲しいの……！お願い」

ルイは、私の従者。迎えにきてくれたときに、変に騒がれないよう、エリナに頼む。

ぎゅっと手を握って渾身をお願いをする。優しいエリナなら、絶対引き受けてくれるはず！

「もう！しょうがないな。あんまり無理しちゃダメだよ？」

「ありがとう！感謝しても仕切れない……！」

私の親友は本当に優しい。

後のことは、エリナに任せたので、私は、ルシアンを探すことに集中する。運がいいことに、女子会が開かれていたのが、王城の中だったので、すぐ探し始めることができた。

「ルシアン、3回も会ってる女性の話なんてしてなかった……私がルシアンのこと好きっていうのがバレたのかしら……？面倒なことになりたくないから言わなかったとか……？……うう……」

少し泣きそうになる。もう何年も前だが、ルシアンに遊んでもらっている時に、好きと言いたことがあったのだが、ありがとう、俺も妹みたいに可愛いリディアが好きだよと返されてしまった。私の好きは、ずっと特別な好きなのに、ルシアンの好きは特別じゃない。それでも、諦められなかったから、ずっと思い続けて、可愛くなれる努力や、お嫁さんになるための修行も密かに頑張ってきた。

数週間前、ルシアンに、お見合いの話が持ちかけられていると知った時、

「え！ルシアン、結婚するの……………？」

「んーまだしないかな」

そう言っていたから、まだ結婚は先！アプローチできると安心しきっていたのに……

王城の後ろに、綺麗な庭園があり、ルシアンが王城に仕事で来た時に1度そこで遊んでもらったことがある。女性と歩くにはもってこいだし、もしかしたらそこにいるかもと、急足で向かう。

「あれ？リディア？今日は、エリナと女子会に行ってるんじゃないかったか？」

「フェリクス様！あ……………ちょっと用があつて……………」

「もしかして、ルシアン探してるのか？あいつは、今日お見合いらしいから、行ってもな」

フェリクス様の言葉で一気に血の気がひく。ああ、本当に結婚しちゃうんだ……………まだしないってこの前言ってたのに……………ルシアンのこと1番知ってるのは私なのに……………。

フェリクス様の横を素通りして、庭園に急ぐ。こんなに必死に走ったのは久しぶりな気がする。

庭園はいつも通り、静かで、季節の花々で彩られている。

風が吹くたびに草木の爽やかな香りが体を包み込む。

綺麗に整備された道を歩いていると、奥の方に、ルシアンの後ろ姿が見える。

「あ……………本当に結婚しちゃうの……………」

隣には、クリーム色の背の高い令嬢が立っている。

遠回りして、ルシアンに見つからない場所から2人の様子を確認すると、私に見せたことのない表情をしているルシアンがいた。

「や……………だ……………ルシアン、他の人のものになっちゃうなんて嫌だ……………」

もう、どうなってもいい…………。

このままルシアンに本当の思いを伝えられないまま、誰かのものになってしまいうなんて耐えられないと思った。

誰かのものになる前に、自分の気持ちだけ伝えたい。

ルシアンのお見合いが終わったら気持ちだけでも伝えようと決めて、その場を離れようとした瞬間、令嬢が、ルシアンの裾をぎゅっと掴んで、顔を近づけるのが見える。

「だめー！！！！」

「……………リディア？どうしてそんなところにいるんだ？」

走って、ルシアンに抱きつく。

「だめっ……………！ルシアンは私と結婚するの……………！だめっ！」

「……………うーん、そういうことだから、最初に言ったように、今日でこのお見合いの話は終わりにしてくれろ？私の方から上手くいかなかったって伝えておくから」
「…………約束だから、仕方ないわね」

最初から、お見合いは断るつもりだったような話ぶりで、一気に冷静になる。令嬢も、最初からわかっていたかのように、すぐ去っていく。

「リディア、ルシアンは私と結婚するのって言ってたけど、どういうこと？」

ルシアンの胸に顔を埋めたまま、素直な気持ちを伝える。

「……………そのままの意味っ……………ルシアンのことが好きなの……………ずっと！ルシアンに助けてもらった時から、ずっと特別な好きで……………」

思いが溢れて、涙が出てきてしまう。伝えたいことはたくさんあるのに、上手く話せない……………。

泣きじやくる私の背中をトントンと優しく叩いてくれるルシアン。その優しさにまた泣きそうになる。

「リディアは、ずっと私のこと好きで、結婚したいって思ってくれてたってことで合ってるかな？」

「……うん……。ルシアンからすれば、私は妹みたいな存在かもしれないけど、私は、男性として、ルシアンのことが好きなの……！」

「え……？」

「え……？」

「妹みたいな存在なんて言ったことあったかな？私もリディアのことずっと好きだったんだけど……年の差とか色々あってリディアと特別な存在になることは諦めてたのに……リディアからそんなこと言われたら嬉しくて、もう離してあげられなくなってしまおうよ」

「う、うそ……ルシアンと同じ気持ち……？」

「うん、同じ気持ち。リディアはずっと私の特別だよ」

これが現実だと受け止めきれなくて、ルシアンの胸から顔を離し、頬を思いっきりつねる。

「こら、そんなことしたら可愛い顔に傷がついてしまうだろ？」

両手を握られ、

「現実かどうか確かめたいの？これで現実ってわかるだろ？」

綺麗な顔が近づいてきて、びっくりして思わず目を瞑ると、唇に温かくて、柔らかい何かがフニッと当たる。すぐにキスされたとわかる。

「ふう……！！！」

「これで現実だとわかっただろう？」

大好きでたまらない人と、両思いだと分かっただけでも衝撃的なのに、キスまで……！！？
逆に現実へ戻れない。

「急にキスしてびっくりさせてしまったかな？リディア、戻っておいで」
「あ……う……ごめんなさい……びっくりしちゃって………」

近くのベンチに座ろうと、手で支えてくれる。

ミニバラのローズアバーベンチは、とても可愛くて癒される。

「落ち着いた？」

「うん……あの、ルシアン……」

「ん？」

「お見合い邪魔してごめんなさい……」

「ああ、急にリディアの声が聞こえてきたからびっくりしたけど、リディアの思いを聞けて嬉しかったから許してあげる」

俯いた私の頭をポンポンと撫でて、あっさり許してくれるルシアン。

「でも、リディアには、まだ結婚しないって言ってたはずだけど……どうして急にあんなことになったのかな？」

「うう……今日女子会があるって話してたでしょ？そこで、ルシアンが3回も同じ女性と

会ってるって聞いて、今回は本当に結婚しちゃうかもって焦っちゃったの……」

「そっか。それで、私が他の人のもになっちゃうと思ってるって急いできてくれたのか」

「ル、ルシアンと両思いなんて夢みたい……」

嬉しくて、にやけてしまう。

「私と両思いでそんなに喜んでくれるのか……リディアは本当に可愛いな……」

誰もいないのいいことに思い切り2人の世界に入り込んでしまう。

「リディアの、結婚してくれるって言葉、本当？」

「ほ、本当！嘘なんてつかない……！ずっとお嫁さんになりたくて、色々秘密で頑張ってたんだもん……」

「へー、色々頑張ってくれてたんだ。じゃあ、すぐ結婚できるかな」

「できるっ！」

「じゃあ、今からリディアの両親へ挨拶に行こっか」

「今から……!?!」

「うん。私が周りから結婚しろってしつこく言われているの、リディアは知ってるだろう?」
「うん」

「だから、リディアと恋人の状態だと、また色々な女性を紹介されたり、勝手にお見合い話を組まされる可能性があるんだよね。人の気持ち考えられない奴らばかりだからさ。リディアも、私が、他の女性と会うなんて嫌だろう?」

それは、嫌……。さっきみたいにお見合いして、ルシアンが他の女性に触れられてしまふかもしれないなんて考えたくもない。

「嫌……………すぐ、結婚するっ……………」

「よしよし」

結婚の挨拶に行くことが決まってからのルシアンの行動は、びっくりするくらい早かった。

魔法電話を使って私の家にアポをとって、自分の予定も調整していた。

「よし、リディアのお家から〇×出たから、今から挨拶に行こうか」

王城の外には、すでに馬車が用意してあって、エスコートしてくれる。目立たないようにと、裏側に馬車は用意されていた。

まさか、1日でこんなに事が進むと思っていなくて、頭の中は、はちゃめちゃであったが、森の中を走っていると、自然の風が窓から入ってきて、心地よくて、少し頭がスッキリしてくる。

「リディアの両親には、しょっちゅう会っているとはいえ、結婚の挨拶となると少し緊張するな」

「私も緊張する……でも、私の両親は、喜んでよろしくお願いしますって言う気がする……だって、毎日のようにルシアンのお話をしていたから……」

「そうだったら嬉しいけどな」

そんなこんなで私の家の前に馬車が止まった。

家の入り口まで使用人が並び、馬車が止まった場所には、両親と弟が出迎えるの服装で立っている。

侯爵様を迎えるとなると、かなり準備に時間を要するはずだが、まるでこの時のために日頃から準備してきたかのように、完璧な出迎え状態である。

「お久しぶりでございます、ルシアン様」

「急な訪問依頼にも関わらず、受け入れていただき感謝します」

いつもと違う空気を感じ、緊張してくる……。この異様な訪問に、家族は、気がついていいるだろうか。

「ささ、お話途中で」

ルシアン様に腰へ手を回された状態で、客室へ入っていく。自分の家なのに、自分の家じゃないみたい……。

「今日は、どのようなご用件で？」

「今日は、リディア嬢との結婚を許していただきたく、訪問させていただきました」

「まあ！」

母が高い声で驚く。予想していなかったのかな……？

「うおっほん！」

父の咳払いで一氣に緊張感のある空気になるが、

「本当にルシアン様と結婚することになるとは……娘は、内気ですが、自分の意思を強く持っていて、家の中だと少しわがままになります。あなたのような素晴らしい人と出会えたことは娘にとって人生を変えるくらい大きな出来事だったのでしょう……。あなたは、国を守る強き男……任せるのにこれ以上最適で最高な人間はいないと思っていましたので、今日挨拶に来てくれて嬉しいのです……。少し寂しいですが、娘をよろしく願います……」

父の涙を初めて見た。

いつもキリッとしていて、怒ると少し怖いけど、今日の父は、優しく、家族の愛を感じた。

「ありがとうございます。必ず幸せにします」

見たことない、キリッとした表情をするルシアンに、ドキッとしてしまう。

「リディア、幸せにね」

母の優しい笑顔で部屋の空気は一気に暖くなる。

「……うんっ……ルシアン様のいい妻になれるよう、頑張ります………！」

ルシアンは、辺境伯で騎士団長。ラフな口調で話すのは2人の時だけだ。

父と、ルシアンが別室で今後について話し合っている間に、迷惑をかけてしまったルイ

のところへ謝りに行く。

「ルイ〜？」

「お嬢様……！」

仕事をしていたみたいで、書類を持ったまま駆け寄ってくる。

「エリナ様をいのように使ってどこに行ったかと思えば、ルシアン様から旦那様に電話がかかってくるし……急に結婚が決まっているし……はあ」

「ごめん〜！！」

「……………まあ、ずっと、ルシアン様を想って色々頑張ってきましたもんね……よかったですじゃないですか」

「うんっ……………」

「リディアー！」

話し合いが終わったお父様に呼ばれる。

「お父様？ルシアン様？話し合い、終わったのですか？」

「ああ。それでね、ルシアン様のご意向で、早速今日から一緒に住むことになったから、支度をしてきなさい」

「きよ、今日から！？」

「そうだ」

色々聞きたかったが、侍女たちに自室へ連れられ、お気に入りの本や、写真、服数着を準備させられた。

「服、これだけじゃ、足りないんじゃないかしら……？」

準備してくれている侍女のビオラに話しかける。

「ほとんど向こうで用意してくれるみたいです。今日と明日分の服だけでいいと言われまし

た。お嬢様に一番似合うこのワンピースにしましょう！あと、靴はこれで……あ！お嬢様、あの本も持っていた方がいいんじゃないですか？」

あれよあれよと、準備が進み、気が付けば、ルシアン様が王都へ滞在中に過ぎすお城へついていた。

「わあ……大きい……」

基本自分の領地で過ごし、王都へ仕事に来る時は、限られた人間しか使うことを許されていない高位の移動魔法を使っていると聞いた。王都への滞在が少ない割に、城は私の家より広く豪華だった……。

「ここには、数日しか滞在しないが、リディアが心地よく過ごせるように手配したからね。領地に戻るまで、残った仕事を片付けないといけないから、リディアと過ごす時間が少なくなってしまうんだけど、領地に戻ればたくさん一緒に居られるから、いい子で待ってね」

ポンポンと宥めるように頭を撫でられる。

「お仕事、邪魔しないようにいい子にしてる」

「……………王都を発つ前日は一緒に過ごせるから、その時までいい子で待っていられたら、ご褒美あげる」

ご褒美という言葉を口にした瞬間、ルシアンが、一瞬見たことない雄の表情に変わった気がしたが、気のせいだろうか…………？

あ…………もしかして、ご褒美ってエッチなことかな…………恋人になった男女がすることなんてエッチなことしかないよね……………！どうしよう、もう緊張してきた……………！

ずっと懂れていた人と、遂に結ばれることができると思像して、色々妄想してしまう…………。この日のためにエリナと色々勉強してきたことを思い出して、赤面する。

「リディア？聞いていたか？」

「あっ…………ごめんなさいっ！」

「もうすぐ、王城に戻らないといけないんだ。侍女のフレリスに色々頼んだから、ゆっくり過ごしてくれ。明後日帰ってくるからな。恋人になってすぐ、離ればなれになるのは悲しいが、すぐ戻ってこれるようにさっさと仕事を片付けてくるからね」

ぎゅっと大きな体で包み込んでくれる。

「お仕事、頑張ってください……」

ぎゅっと包み込まれて、少し寂しくなる。

「ありがとう。離れていても頑張れるようにリディアからキスしてほしいな」

「あ……………う……………」

この前のキスが初めてだったのに……！自分からキスするなんて難易度高い…………！

どうしよう、キスってどうやってすればいいのと悩んでいるうちに、目の前で、目を瞑り始めるルシアン。

「ルシアン様、そろそろ」

従者にドアをノックされ、焦る。どうしよう！えい！

ぎゅっと嚙んだ唇でキスをした瞬間、大きな手で頭を押さえられ、ちゅっちゅと顔の角度を変えて、何度も唇を啄まれる。

「んっ……………」

「もっとこの力抜いて」

ぺろっと唇と舐められ、びっくりして、声を出してしまう。

「んあっ……………！」

その瞬間を狙っていたかのように、温かい舌が口の中に侵入してくる。

「んっ…………ふっ…………んん…………♡」

…………ちゅづクチュ、チュパづ…………ちゅぐちゅっ…………

大人のキスだ……。こんなに気持ちいいんだ……。頭の中真っ白になる……。

「力抜くの上手だね」

「ふぁっ…………んくっ…………ん…………♡♡♡」

もう、だめっ…………体に力が、入らないっ…………

ガクッと膝から崩れ落ちそうになった瞬間、大きな手で支えられる。

「おっと。刺激のすぎたかな？とろとろお目目でかわいいな。今日は疲れただろう？そのまま、おやすみ」

心地いい眠気に襲われて、夢の中に迷い込まれてしまった。

次の日は、侍女のフレリスにお城の中を案内してもらい、小さな木々と小さなお花で作られたお庭の中で小説を読んで過ごした。

そうして、あつという間に、ルシアンが、仕事を終えて、帰宅。

「ただいま、リディア」

「お帰りなさい……！」

「リディアのおかえりを聞けるなんて、夢みたいだ」

気持ち繋がってから、感情を素直に出してくれるようになった気がして嬉しい。キスもそうだけど、一緒にいられることを喜んでくれたり、可愛いという言葉だったり、全部に愛を感じて本当に、特別になれたんだって安心する。

恋人になって初めての2人での夕食の時間。昨日は、1人での夕食だったけど、どれも美味しくて、寂しいとか感じなかった。夜は、少し寂しかった……けどね。

「リディア、昨日はなにしてたんだ？」

「フレリスにお城の中を案内してもらって、裏庭で実家から持ってきた本を読んで……」

昨日の出来事や、食べた物を細かく話す。

ルシアンが楽しそうに聞いてくれるから、嬉しくてたくさん喋ってしまう。

「楽しく過ごせたみたいでよかったよ……リディア、少し話があるから、寝ないで待っていてくれるか？明日の準備と残ってる仕事を片付けたら寝室に行くから」

話って……なんだろう。

やっぱり結婚するの辞めたいと言われたらどうしよう……。

ルシアンちよつと暗い顔してるし……。

もやもやしたまま湯浴みをして、ルシアンの寝室で寝転がって待っている。

初めて一緒に過ごす夜だから、セックスするかもってウキウキだったのに……。

ルシアンから何の話をされるのか色々想像していると、寝室の扉がノックされ、少し髪の毛濡れたルシアンが入ってくる。

ピチッとした黒のシャツにラフな黒色スラックスは、色っぽすぎて、悩んでいたことを忘れて、ドキドキしてしまう。

「ごめんね、お待たせ……寝間着姿もたまらないな」

フレリスが丁寧に梳かしてくれた髪を大事そうに撫でるルシアン。

「ルシアン……お話って……？」

「ああ、カリス領について、少し話しておかないといけないことがあってね」

長話になるのか、レモンティーを入れてくれる。

「リディアは、カリス領についてどのくらい知ってる？」

「んー……普通の馬車だと、ここから3週間くらいかかるってところくらい？」

「辺境なこともあって、文化は閉鎖的なんだ。ただ、外部との交流の地に使われることが多いから表向きは、外交的で通ってるんだけどね」

「文化が閉鎖的ってどういうところが？」

「純情なリディアが受け止められるかわからないけど、ちゃんといい子で聞ける？」

「聞ける……！恋人になったんだから、もう子供扱いしないでほしい……」

しゅんと俯くと、あやすようにちゅつと頭にキスされる。

「わかった、子供扱いしないよ。もうリディアは大人の女性だもんね」

「……うん……！」

「話を戻すけど、カリス領で、結婚を認めてもらうためには条件があるんだ」

「条件？」

辛い花嫁修行に合格しないといけないとか……？し、試験でもあるのかな。

「リディアのクリトリスが私の贈るリングにハマること」

……………？

なんて？

ルシアンの中から予想外の言葉が出てきて、全く理解できなかった。

「クリ、トリス？……リング？……ハマる？」

「そう。リディアのここにあるクリトリスが、私が贈るリングにハマらないと結婚できない。こっちでいうと、指輪を相手の指にはめてあげるのと一緒だよ」

ルシアンは、私の下腹部をトントンと軽く叩いて、同じ説明をする。

「リ、リングってどのくらいの大きさ……？」

「うーん。基本選ぶのは男性側んだけど、私は、カリス領を治める辺境伯という身分だから、受け継がれているリングがあるんだよね。サイズも領主の私だけ、知ることができるんだ」

「じゃ、じゃあ、どうやってはめられるくらいのサイズになったか確認する……の……？」

「サイズを知ってる私がリディアのクリトリスをチェックするんだよ」

ルシアンが、私のクリトリスをチェックする……？

もう何が何だかわからない。

しかも、クリトリスってそんなに簡単に大きくなるものなのかしら……？

どうやって大きくすればいいんだろうか……誰かに、痛いこと、されちゃうの……？

予想外のことを言われて、不安な気持ちになってしまい、落ち込んでいると、ルシアンが、手を握ってくる。

「不安な気持ちにさせてしまったかな？でも、リディアを傷つけるようなことは絶対しないよ」

「それは、ルシアンのこと信じてるから大丈夫……。でも、クリトリス、どうやって大きくするのかなんて……痛いことされちゃうの……？」

「痛いことはしないよ。どうやって大きくするか……。んー、私がリディアのクリトリスいっぱい虐めて、大きくするよ」

「い、虐めるっ………！」

痛いことじゃん……！

「虐めるって言っても、エッチな虐めだよ」

ふふっと笑うルシアン。

「エッチな虐めってなに……！？エッチなことしたことないからわかんないよ……」
「クリトリス大きくするのも、エッチのお勉強も、一緒に頑張ろうよ、ね？リディアなら、クリトリス大きくできるよ。それに、せっかく両思いになったのに、これでお別れになっちゃうのは悲しいだろ？」

確かに……。

私が、クリトリスを大きくできれば、結婚を認めてもらえる……。
それだけ頑張れば、ずっと大好きなルシアンと一緒に居られるんだ……！

「うん……。不安な気持ちもあるけど、ルシアンのこと信じてるし……お別れなんてしたくないし……。！頑張る……。！」

ぎゅっと唇に力を入れて、決意を固める。

「嬉しいよ。私のために頑張るって決断してくれて。クリトリスいっぱい虐めて、頑張って大きくしようね」

耳元で囁かれて下腹部がキュンと疼く初めての感覚に襲われる。

「耳真っ赤になったな。虐められちゃうかもって期待したのか？」

「ちがつ……。！」

「初めて、2人きりで過ごす夜だからな。私も工作中、リディアのことで頭いっぱいだったよ。早く帰りたくて仕方なかった。リディアも、期待して待っていてくれたか？」

恥ずかしくて、無言の頷きになってしまう。

「おいで」

大きく広げられた腕の中に入っていくと、ぎゅっと包まれる。

首筋に、ちゅつ、ちゅつと、啄むようなキスが繰り返され、ビクビクと体が震えてしまう。セックスの経験がない私でも、始まる合図だとわかる。

どうしよう、早速クリトリスの大きさとか確認されちゃうのかな……。まだ、心の準備できてないのに。

首筋を舐められて気持ちいいのに、この後、クリトリスをじっくり見られてしまうかもしれないと思うと、体に力が入ってしまう。

「体に力入っちゃってるね。まだ、クリトリスいっぱい虐めたりしないよ。今日は、いっぱい気持ち良くなつて、エッチなこと好きになる時間にしようね」

よ、よかった……。おまんこじっくり見られるなんて、初心者にはハードすぎる……。不安が和らいで、ルシアンに意識が向けられるようになった。

「んっ…………首にキスされるの…………気持ちいいっ……………♡」

「気持ちいい？リディアは、ちゃんと気持ちを言葉にできるいい子だもんね」

いい子だと、ルシアンに褒められると嬉しくて、たまらない気持ちになる。

…………ちゅっ…………ちゅぐ、ちゅづ……………♡

首から、どんどん口元へ、ルシアンのふっくらしてエロい唇が移動してくる。

「んっ…………んむっ……………♡」

軽く啄むキスが繰り返される。ルシアンに合わせて、下唇を軽く噛んだり、顔の角度を変えたりする。

「この前教えたこと、覚えてるみたいだね。唇の力抜くの上手だよ」

ちゅくちゅくと、唾液の絡む音が部屋に響き渡る。

数分間繰り返し返すと、お互いの唾液で、唇が湿り、しっとりした感覚が更に気持ち良く感じる。

「ふうっ……♡んあっ……んっ……♡」

息が苦しくなって口を軽く開けた瞬間、ルシアンに舌をねじ込まれ、甘い声が出てしまう。

キスが深くなればなるほど、苦しいはずなのに、子宮がキュンと疼いてしまう。

「お目目とろとろになったね。キス、気持ちよかった？」

「気持ち……いい……頭、真っ白になっちゃいそうだった」

「長くキスしても、倒れなくなっただね。体の力も抜けたみたいだし、次に進んでいい？」
「……うん……」

ガウンを脱げば、フレリスが着せてくれた、ピンク色のフリルの付いている可愛い下着が頭になる。

「可愛すぎて、理性を抑えられなくなりそうだ……この下着、私が選んだんだよ。だから、着てくれて嬉しい」

「え！？やっぱり……？可愛いけど、少しエッチな下着だったから、もしかしてって思ったんだけど……ルシアンが用意したものだったんだ」

ブラジャーはピンクのフリルと白の刺繍が可愛い普通のデザインだが、パンツが、サイドを紐で結ぶタイプで、お尻が丸見えである。

ルシアンは、着てくれて嬉しいと言っていたが、フレリスに普通の下着がないかと聞いたところこれしかないと言われて仕方なく履いたのだ……。

その時点でなんとなく、ルシアンが選んだのではないかと予想していたが、当たっていた。

少し恥ずかしいけど、喜んでくれてるしいいか……。

じっくり下着姿を眺められ、満足したルシアンは、胸元にキスを落とし始めた。

「リディアの体、いっぱい可愛がらせてね」

簡単にブラジャーを取られてしまい、反射的に乳首を隠してしまう。

「こら。そこ隠したら、リディアの乳首、可愛がれないだろ？」

「裸見られるの、初めてで、恥ずかしい……！」

「こんなことで恥ずかしがってたら、クリトリスの確認される時どうするんだ？ 私に裸を見せるのにもちょっとずつ慣れていこうね。」

腕を掴まれて、ゆっくり、下に降ろされていく。

緊張と、キスでほんの少し先端がぷっくり勃起始めている気がして、隠したくなるが、ルシアンがそれを許してくれない。

「リディアの乳首、お花みたいに可愛いピンク色なんだね」

そのピンク色の乳首が、ルシアンルシアンの舌でチロチロと舐め回される。

「んあぁっ……………♡ち、乳首いっ……………♡」

感じたことのない、乳首の先端をじくじく電撃が走るような快感が駆け巡り、甘い声が出る。

周りを舐められ、もう片方は、ルシアンルシアンの綺麗な指で摘まれ、コリコリと左右に潰されている。

舐められるのも、指でコリコリ弄られるのも気持ちよくてたまらない。

小説で想像していたより、はるかに気持ち良くて、頭の中はぐちゃぐちゃだ。

「はぁ…………ルディアルディアの乳首、甘くて、美味しい。少し舐めただけで、こんなにぷっくり勃つなんてリディアリディアは、エッチな子だったんだね」

ルシアンルシアンに言われて、自分の乳首を見ると、さっきより、ぷっくり腫れて、今までになつたことのないエッチな乳首になっている。

「あ……あ……ち、乳首が……♡」

もう片方も、レロつと舐められ、じゅつと吸われる。

「んぁっ………だっ……めっ………吸うのだめっ……気持ちいい………!!」

じゅつと吸われるたびに、気持ち良くて体が勝手に動いてしまう。

……レロっ、ちゅぱっちゅぱっ……じゅっ……

「吸われるのが好きなのか。腰もいっぱいぐねぐねさせて、早くこっちも触ってほしいのかな？」

下着の上から、ヌコヌコとおまんこを太い指で擦られる。

「ふっ……………うう……………すりすりだめえ……………♡」

ただ、下着の上から擦られてるだけなのに、ぐちよぐちよに濡れているのがわかってしまう。

「初めてなのに、乳首とキスだけで、こんなに濡れ濡れになれたのか。体も私好みで可愛いな。こっちも乳首みたいに、いっぱい舐めて、気持ち良くしてあげるからね」

ルシアンに、おまんこを見せて、舐められるのなんて、恥ずかしい……………！！

そういう行為を小説で読んで、憧れていたけれど、ルシアンに実際にされると、身構えてしまう。

それに、乳首を舐められただけで、あんなに気持ちよかったのに、もっと繊細で敏感なおまんこを舐められたらどうなってしまうのだろうか……………。

「リディア、ベッドへ横になってごらん」

ルシアンに言われ、横になった瞬間、パンツの横紐をスルッと解かれ、簡単に脱がされてしまった。

「あっ……………！」

思わず、脱がされている足の方を見ると、パンツについた愛液が、糸のようにツツと伸びている。

「リディア、愛液いっぱいパンツに垂らしてしまったから、糸みたいに伸びてしまったね」
「やあ……………」

恥ずかしすぎて、真っ赤になった顔を両手で隠している隙に、膝をバツとエム字に開かされて、ルシアンにおまんこが丸見えの状態にされてしまった。

「う、そつ……………！だめつ……………！みちやだめえつ……………！！！」

顔を隠していた、手をおまんこに持っていき、ルシアンに見えないように両手でぴっちり隠す。

まだ、心の準備、できてないのに……！

「ああ、また隠してしまったな。リディア、お仕置きしてほしいのか？」

「おし、おき………」

「リディアは、さつき、私とクリトリス大きくするのも、エッチのお勉強も頑張るって決めたばかりだろう？なのに、乳首もおまんこも手で隠してしまって、反抗的な態度をとってしまっているね」

「……………ごめんさいっ……………もう、もう隠さないから、お仕置きはやだあ……………」

恥ずかしかったとはいえ、反抗的な態度をとってしまったことに反省して、涙目になってしまう。

「もう隠さないでできる？」

「できっるっ……………！」

「ん、じゃあ、お仕置きしないで、さっきの続きしようね」

ルシアン視線が、おまんこから離れない。

見られながら、そっとおまんこを隠している手を元に戻していく。

「自分でちゃんとできたね。ああ……………リディアのおまんこ、まだ中、全部見えてないけど、乳首より濃いピンク色だね。可愛い……………1人でいい子にお留守番してくれたから、ここ、虐めて、気持ちよくしてあげるね」

「ん……………♡」

ルシアンがおまんこを見つめてる姿を直視できなくて、顔を横に逸らす。

「おまんこ弄られるところ見てなくていいのか？初めて触れられるのに」

そう言われて、確かに、どうやって弄られちゃうのか、気になり、自分のおまんこに視

線を向ける。

「リディア、おまんこもつと見えるように、体勢変えようね」

立てていた太ももを更におまんこが見えるようにグッと押さえつけられる。

「ここ、自分で押さえて、おまんこの中まで見えるようにしててね」

「う……ん……………」

言われた通り、自分の手で太ももを押さえる。

大陰唇が、ぱっくり開いて、スースーと空気を感じる。

じっくりおまんこを見るルシアン。もしかして、クリトリスのサイズ確認されてるのかな…………？

「る、ルシアン…………？私のクリトリス…………小さい…………？大きくならない…………？」

「ああ、ごめんごめん。リディアのおまんこが可愛すぎて、見惚れてしまっていた……。うー

ん、小さめかもしれないけれど、私が大きくしてあげるから心配しなくて大丈夫だよ」

小さめ……なんだ……。本当に大きくできるのかな……。

「大きくできるか心配？」

「うん……………」

「じゃあ、ちょっとだけ、クリ大きくするの頑張ってみよっか。少しでも大きくできたら自信になるだろう？」

「痛くない……？」

「気持ちいいことしかないよ」

そういうと、大きな鏡をベッドの足元の方に持ってくるルシアン。

私を軽々と抱っこして、鏡におまんこが映る姿勢になるように、足を固定して、後ろから抱き締める。

鏡に映る自分のおまんこは、想像以上にピンク色で穴の部分がひくひくしていた。こんなにまじまじと見たことがないので、恥ずかしさを忘れて、観察してしまう。

「自分のおまんこ、こんなにじっくり見たことないだろう？」

「うん……」

「リディアのクリトリスは、まだ皮を被った状態だから、まず、この皮を剥くのが頑張ろうね」
クリトリスの皮部分をキュッと摘まれる。

「んっあぁっ……………♡」

少し触れただけなのに、乳首の比じゃない快感が襲ってくる。
鏡から目が離せない。ルシアン綺麗な指が、乳首を刺激されて濡れた密穴を擦って、ぐちよぐちよになる。

「クリトリスは、愛液みたいにぬるぬるの液つけてから触るんだよ。乾いた指で刺激すると、摩擦が強すぎて、辛くなっちゃうからね」

「ふっ……………ん……………ぬるぬる、気持ちいいっ……………♡」

愛液をクリトリスに塗りつけられ、左右にコリコリと優しく揺すられる。

鏡に映るクリトリスは、最初より、色が濃くなって、少し大きくなった気がする。

「く、くりっ……大きくなった気がするっ……♡♡♡」

「うん。クリトリスも乳首みたいに、刺激するところやってぷっくりするんだよ。リディアのクリトリスも、ぷっくり腫れてきたね」

よかった。私のクリトリス、大きくなれるんだ……！大きくなったのなんてほんの少しだけだけど、それでも安心できた。

「自信ついたみたいで、よかった」

鏡越しにルシアンが嬉しそうな表情をしているのがわかる。

「安心して、エッチなお目目になってきたね。ここもさつきよりぐちよぐちよになってる

し。クリ、気持ちいい？」

「気持ちいいっ……………♡！……………コリコリされるの、気持ちいいっ……………！！」

裏筋から先端にかけて、ピンピンと弾かれるのも、左右にブルブル揺られるのも、全部初めての快楽でたまらない。

クリトリスのことしか考えられなくなる。

……………びんっぴんっ……………こりっこりっ……………

「あう……………♡……………なんかっ……………きちやいそうっ……………♡」

溜まりきった快感が弾けそうな感覚に襲われる。多分、これが絶頂するということなのかもしれないけれど、全てを飲み込まれそうな感じで少し怖い……………。

「きちやいそうな時は、いくつて教えてね」

「……………いく……………？」

「そう。絶頂するときは、いくつて言っ、私に教えて？ちゃんと教えてくれたらイかせてあげる」

その間も、クリトリスを指でピンピン弾かれて、ビクビク腰が震える。

「いっつつつつく……♡……いぐいぐ……♡」

いく、と、鏡越しにルシアン目を見て、言うと、クリトリスを弾く速度上げられ、快楽が込み上げてくる。

「……………だめっ……！くっる……………！！！」

「リディア、いく、だろう？」

「いっつつつつつつ……！！！！！」

ビクビクと体が勝手に震える。

頭が真っ白になって、何も考えられなくなる。ただ、クリトリスから脳にかけて、雷が

落ちたような快感が走り、息ができなかった。

初めての絶頂、鏡に映っている自分の顔があまりにも幸せそうで、見惚れてしまった。

「はあ……………はあ……………♡♡♡」

「初めての絶頂はどうだった？」

「んっ……………気持ち良くて、頭、真っ白になった……………まだ、気持ちいいの続いてて、おかしくなるっ……………クリ、しゅ、ごい……………♡♡♡」

「リディアのおまんこ見てごらん？」

ルシアンに言われて、鏡に視線を戻す。

「触る前より、大きくなったと思わないか？リディアのクリトリス」

クリトリスは、愛液でテラテラと輝き、赤黒く染まっていた。

大きさも、最初より、ぷっくり腫れて大きくなっている。

「おお、きくなってる……………ルシアン…………あと、どのくらい大きくすれば、リングはまる…………？」

「んー。この倍以上頑張らないと厳しいかな」

この倍以上…………？倍以上ってどのくらいなんだろうか…………。

大きくなったと喜んでいたのに、すぐ厳しい現実を叩きつけられて絶望する。

「でも、最初でこんなに大きくできたリディアなら、頑張れば、リングがはまるくらいの大きさになれるよ」

ルシアンにそう言われて少し気持ちを持ち直す。

「そ、そうかな…………もっと頑張るっ……………」

「やる気出してくれて嬉しいよ。リディアがやる気出してくれると、もっと気持ち良くしてあげたい気持ちになって、幸せな気持ちになる…………次は中イキして、少しでもクリ大きくしてみようね」

ルシアンの中指先端が、小さな密穴にぬぷりと入っていくのをまじまじと見つめる。
す、ごい……。小さな穴の中に指が入ってる。

自分で入れるのは、怖いと思っていたが、ルシアンにされるのは、なぜか怖くない。
痛みも感じないし、ぬこぬこと出し入れされることに興奮する。

「んっ…………ふっ…………♡」

「おまんこの力抜くの上手だね。いっぱいヌコヌコして、まずは、私の指、奥まで受け入れられるようになるうね」

挿入されている指から意識をそらすためか、空いている方の手で乳首、クリトリスを弄られ、意識がそっちに向いてしまう。

「あう…………♡乳首っ、引っ張るのダメえっ…………ふうう…………クリも、いっぱい
コリコリしちゃダメえ…………♡」

クリトリスと、乳首で気持ち良くなっているうちに、ルシアンの指はどんどん奥へ奥へヌコヌコと挿入されていく。

ぬぼっぬぼっ……クチュ……♡♡♡

「すごいね、リディア。もう、私の指、奥まで咥え込めたじゃないか」

鏡にルシアンの長い指が根元までおまんこでしっかり咥えこんだ姿が映っている。

「……ほん、とだあっ……♡」

ルシアンのおちんこを奥まで受け入れることをずっと考えてきた。

指1本でみっちりに見えるのに、本当に入るのだろうか。

そもそも、ルシアンのおちんこのサイズってどのくらいなのだろうか。

「甘い顔になってるし、痛みはないみたいだね。このまま、指動かすね」